

降圧薬の長期使用によりがんリスク上昇

降圧薬とがんとの関係については、発がん作用のあるものもあれば、発がん抑制作用のあるものもある。本研究では、日本人を対象に10年もの長期にわたる降圧薬の服用と発がんについて、大規模前向き研究（JPHC）のデータを用い検討した。

降圧薬の服用状況別に4群（服用なし群・5年未満服用群・5～10年服用群・10年以上服用群）に分け、がんの罹患リスクを調べた。その結果、服用期間の違いと全がんの発生率とに有意な違いがみられた。がんの部位別では、服用なし群と比べた10年以上服用群の発がんリスクは、大腸がん（多変量ハザード比 1.18）、腎臓がん（同 2.14）で有意に高かった。5～10年の服用群では腎臓がん（同 3.76）で有意に高かった。

今回の日本の大規模コホート研究により、降圧薬の長期使用は大腸がんおよび腎臓がんのリスク上昇と関連することが示唆された。

出典：Cancer Science. 2021; 112: 1997-2005.